

ビスホスホネートによる下顎骨壊死を認めた多発性骨髓腫の一例

志村和穂¹、赤松園子¹、谷口享子¹、岡本雅司¹、内田亮¹、金村成智²、島崎千尋¹

京都府立医科大学¹血液内科、²歯科

【目的】ビスホスホネートは、無作為試験で骨髓腫の骨病変に対する有効性が示され、2001 年以降の欧米の多くのガイドラインで、その使用が推奨されている。しかしながら、2003 年に本剤によると考えられる顎骨壊死の症例が報告されて以来、同様の報告が集積されてきた。当科でも本剤によると考えられる顎骨壊死を経験したので報告する。【症例】60 歳男性。1997 年 3 月に骨髓腫(IgG- 型, stage A)と診断され、VMDM-IFN 療法、VAD 療法、auto-PBSCT により経過観察されていた。2003 年 5 月脊髄圧迫症状により放射線照射、椎弓切除、胸椎形成術を受けた。同年 7 月より Thalidomide、Incadronate(当初 10mg/週)、Dexamethasone(TID 療法)を開始し、計 340mg の Incadronate が投与された。2005 年 7 月骨シンチにて右下顎に集積を認め、画像診断にて下顎骨壊死と診断した。【結論】ビスホスホネート治療を行う際には、顎骨壊死のリスクを説明し、投与中は定期的な歯科検診が必要と考えられた。